人と川、自然をつなぐ広報誌

広報誌 かわらんべ

2024年 2 第255号

2024年1月19日発行

館内飼育中のアマゴの子どもたち
エサを食べて成長中

2・3面の伝説は 随分前から「いつか書こう」と考えていた記事 ついに実現

https://www.kawaranbe.net/

開催しました！ かわらんべ講座

12月15日～1月14日のようす

七草がゆを味わう 1/6 38名

お正月の伝統行事　「ななくさ なずな～」を唱えて春の七草をタタキ　災いのもとを追い払いました
新春の野で春の七草さがしも楽しかった！

和紙で凧づくり 12/16 44名

和紙の講座2回目は、和紙と竹ひごで【凧】を作りました　雨で凧揚げはできなかったけど、きっと良く揚がる！

おやす作り 12/23 51名

伊那谷のお正月文化を知る講座
稲ワラと松と和紙を材料にして【おやす】を手作りしました

和紙を使ったあんどん作り 1/13 36名

和紙を使った講座3回目は、10月に漉いた和紙を貼った【あんどん】を作りました

12/21 10名 ウォーキング

城山コースを歩いてメガソーラーを往復

1/11 14名 絵手紙

ご利用いただきました リクエスト講座

12月15日～1月14日のようす

●チャップリン
7名
12月28日（木）

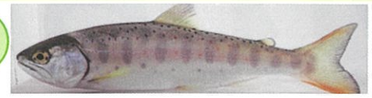
クラフトを体験いただきました

かわらんべは、天竜川総合学習館の愛称で、河童【カッパ】を意味する伊那谷の方言にちなんで名付けられました。
かわらんべは、天竜川の防災拠点であり、天竜川周辺の自然や地域を学ぶ総合学習の場、地域コミュニティーのシンボルでもあります。

天竜川のことを もっと知ろう 寒くて外に出たくない時に 親子で読んでね！

伊那谷天竜川は民話の宝庫 いろんな伝説が語りつがれています 中には巨大な生きもの・想像の生きものも登場します そこには こんな伝説も・・・

飯島町 中川村の伝説 天竜川の巨大魚伝説「あめます さらば」

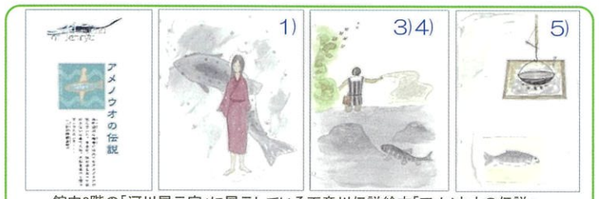


アマゴ
伊那谷の渓流の代表種でその姿は美しい（別名サツキマス
伊那谷での呼び名はあめのうお・あめ）

淵に潜む巨大魚が 娘の姿で現れる

伊那谷には、川の生きものが人の姿で現れる民話がいくつかあります。想像上の生きもののカッパや竜蛇が有名ですが、実在する生きものが登場するものもあります。それが今回紹介する巨大魚の伝説で、伝えている内容はおおむね次のようです。

1) 田植えの忙しい時期に見知らぬ若夫婦が現れて作業を手伝ってくれた。
2) 田植えがすみ、村人は夫婦にご馳走として小豆飯（赤飯）を振る舞った。そして田植えが済むと夫婦は見かけなくなった。
3) 後日、村人が近くの川の淵へ魚とりに行った。
4) その時、とても大きな「あめます」（アマゴ）がとれた。
5) 村人は持ち帰り、食べようとして腹をさいたら小豆が出てきた
6) その翌年から若夫婦は現れなくなった。
7) 若夫婦が「あめます」の化身だと悟った村人は手厚く祀った
8) それから毎年、田植えの日には決まって雨が降る。



館内2階の「河川展示室」に展示している天竜川伝説絵本「アメノウオの伝説」
飯島と中川の伝説のストーリーをモチーフにした作者の創作物語です

天竜川で大型化するアマゴ「あめます」

物語に登場する「あめます」とは伊那谷に昔からすんでいるアマゴのこの地域独特の呼び名の１つで、マスのように大きな姿のアマゴ（あめ）が語源と考えられます。他にも「天竜あめ」や「かわます」とも呼ばれていました。魚の正体はわかりましたが、伝説のように担ぐと地面に届くような大きな魚が本当に天竜川にいるのでしょうか？　昔話によくある架空の設定なのでしょうか？

伝説の中の大きさには誇張がありそうですが、今でも40cmから50cmほどのアマゴは天竜川に生息し、かつて海から伊那谷までやって来ていたサツキマスにはこれを超えるようなものもいたようです。

渓流で見慣れた20cmほどの「あめのうお」とは明らかに異なる大きさと姿をした大型魚は、まるで淵にすむ「ヌシ」のように見え、誰もがその存在に神聖な尊さや恐れを感じたに違いありません。

巨大魚は たぶん「天竜差し」のこと

『天竜差し』となって渓流に移動したあと秋の産卵期を迎えると姿は一変する
（写真提供：天竜川漁業協同組合 伊藤組合長）

天竜川で育ったアマゴは梅雨頃から支川に移動します。秋の繁殖期を意識して最適な産卵環境である山間の渓流に向かうためです。そうした天竜川から支川に移動してくる個体を伊那谷では特別な存在として「天竜差し」（てんりゅうざし）と呼びます。

物語の男女が現れるのは毎年1回 梅雨時で、天竜川のアマゴが「天竜差し」となって支川に入り人里を通過する時期と一致します

例にあげた伝説は中川村のものですが、同様の伝説は駒ヶ根市中沢・宮田村・飯島町・大鹿村でも語りつがれていて、内容は地域によって異なります。そのちがいとは、飯島では２種類の話があったり（文献②と③）、化身は娘だけだったり（飯島）、そもそも化身が登場しなかったり（中沢・宮田・大鹿）、魚が極端に大きかったり（中沢・大鹿）、3)4)と淵から別れの声だけの話もあります（宮田・中沢・大鹿）。また、8)では、食べた人や関係者に災いが訪れ（飯島・大鹿）、旧家に伝わる飯島と中川では霊を祀る祠を建てたとされています（３面で紹介）。

なお、同じアマゴが主役の伝説は隣県の静岡県水窪や愛知県豊根村にもありますが、これらは伊那谷の多くの伝説と同様、主役の生きものの化身が手伝いをしてくれたり物を貸してくれたのに嫌がる蓼（たで：辛い植物）を間違って食べさせたため悲劇や不利益を被るという筋書きなので「あめます伝説」とはやや異なります。

「あめます伝説」の独特な切なさや哀れみは、姿の美しいアマゴが主役だからこそ、いっそう引き立つのでしょう。

悲しむ声が聞こえる「あめます さらば・・・」

「あめます」が発した淵への別れや、淵から・周囲からの嘆きの言葉にはいくつかあります。この声に霊力を感じて伝説を印象付け、口伝えしやすくしているように感じられます。

- 「あめます さらば」（中川・飯島）・「あめます恋しや」（中川:文献④）
- 旧家の門から「あめます恋しや、わが孀（つま）どこへ」（中川:文献②）
- 「あめます さらばよー」（駒ヶ根中沢）
- 「あめますよ さらば　諏訪の祭りにまた会おうぞ」（大鹿）
- 「犬市 さらば」（宮田）

淵から声がする伝説は他にもあります。箕輪町の「おとぼう さらば」、下條村の「おとんぼよう」、静岡県水窪の「おとぼうや」と「おとも待て」。地域ごとの変容は時間と風土の結晶、奥深いですね。

天竜川で育った40cmを超える大型アマゴ
（写真提供：天竜川漁業協同組合 伊藤組合長）

（このことは文献⑧も指摘しています）。また、上流へ向かう途中に滝などの移動をさえぎるものがあると、その淵に留まって秋までにオス・メスのペアになります。物語の季節や情景と魚の生態がきれいに重なります。

では、いにしえの伊那谷人が、天竜川で大型化したアマゴが天竜差しとなって人里に姿を現すことを知っていて民話に登場させたとしたら、その理由は いったい何なのでしょうか？

アマゴの卵

腹から出てきた小豆が意味するものは

この物語の解釈として、「水」とりわけ降雨や諏訪明神との関わり（文献⑥）、異界との接点の淵（文献⑥⑧）を指摘する見解があります。でも、淵で巨大化するコイやナマズやイワナではなく「天竜差し」を主役としたのなら次のような解釈もあり得ます。<以下私論です>

村人にとられた「あめます」がメスだった（文献②③）ことを考えると、物語の山場で魚を食べようとして腹をさいた時に出てきた小豆は、その大きさ・色やプチプチ感からアマゴの卵を連想させます。

たくさんの卵を産める大型魚は、土地の魚を増やしてくれる大事な天然資源ですから、巨大魚をとったあとに災いが起こる話の流れは、産卵のために川をのぼるアマゴをとるのは好ましくないこと伝えているように感じられます。とくに上流へ移動中の魚が足止めされる淵は、そっとしておくべき場所。

この伝説は、天然の産物の枯渇を憂い、未来の私たちに安易な搾取を慎むことを伝えたかったのだと思えてなりません。

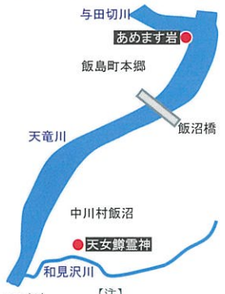
天竜川 川の旅 第35回 天女鱒霊神（あめます れいじん） と あめます岩

中川村・飯島町

天竜川の源流から河口にかけて、天竜川の姿や自然、人々の関わりをご紹介します。

不定期に連載している「天竜川 川の旅」。
今回は左のページの伝説の舞台を訪ねました。
伝説の「あめます」がいた淵は伝説の中だけの場面設定なのでしょうか？　そして「あめます」の霊を祀る（まつる）ため旧家が建てた祠（ほこら）と供養の銘を刻んだ岩は今も実在するのでしょうか？ 天竜川にまつわる伝説としてひと際 悲哀に満ちたこの物語の現代に残る痕跡を探しました。

※本稿の作成に当たって中川村歴史民俗資料館さんには祠や碑など多くの情報を提供いただきました

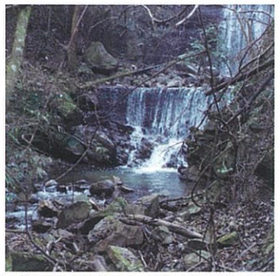


【注】
文献①④および石碑は「天鱒霊神」と表記され文献②④と旧祠では「天女鱒霊神」である
本稿では、かつての祠で使用された後者を用いた

足もとに和見沢川、その先に天竜川を見下ろす中川村飯沼の高台。そこに祠（右）があり、傍らには伝説を伝える石碑（左）が令和4年に建てられた。石碑の裏には文献④の伝説が刻まれている。

中川村の天女鱒霊神（中川村飯沼）

伊那山地の陣馬形山から流れ出る和見沢川。伝説の「あめます」はこの川の最下流の淵で釣り上げられました。伝説では、淵から約200m上の森に祠を建てたとされ（文献①④）、その手掛かりをもとに直下の谷へ降りてみると、そこは深く険しく、木々に覆われて昼なお暗い環境でした。すぐに目にとまったのが岩盤が露出してできた「滝つぼ」らしき淵。滝や淵の規模は変化していそうでしたが、伝説の淵はここだと確信しました。



祠が見下ろす和見沢川の深い谷の底に淵はあった。周囲の地形や岩盤の大きさから想像すると、ここには滝があり、伝説の淵とは魚止めの「滝つぼ」だったのかもしれない。
今は、滝の直上に二段の堰堤が設置されて当時の姿は失われていた。この下流にはさらに大きな堰堤があって、天竜差しの遡上を遮り、堤体が貯めた土砂が滝の落差や淵の規模をも変えてしまったようだ。

文献②によると、毎年 梅雨時の雨の降る夜は旧家の門から悲しそうな声で「アメマス恋しやわが孀（つま）どこへ」と訴えるのが聞こえたため、情け深い旧家では、沢を望む山の中腹に天女鱒霊神を祀り、今でも「おさなぶり」（田植えを終えた祝い）がすむと小豆飯を供えている…と伝わっています。

当時は、裏山に2つの祠があり、そのうちの一つが天女鱒霊神だったようですが（写真左）、20年ほど前に尾根に近い場所に二つの神を合祀した新しい祠が建てられたようです（写真右）。

そして令和4年には旧家の当主によって高台の祠のそばに天鱒霊神の石碑が建てられ、真新しい碑が陣馬形山を行き交う行楽客を見つめています。

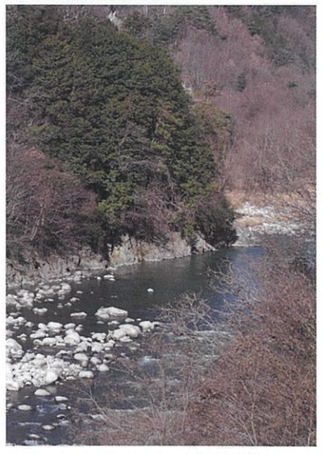
祠が高台に移される前の旧家の裏山にあった頃の「天女鱒霊神」（原典で"昭和36"とされる写真）

※写真は「上伊那誌民俗編上」（文献④）より引用

当初は旧家の裏山の淵を望む山の中腹にあった祠が、現在は高台に移され、山の神とともに祀られたという。取材に訪れた時には祠の中には山の神だけが祀られていたが、傍らには小豆とモチ米・塩・水が供えられていて、伝説の"小豆飯を供えて供養した"その習わしが今も受け継がれていた。

【引用文献　2面・3面共通】※飯田中央図書館などで閲覧できます
①「南向村誌」;村誌編纂委員会編,1966年発行
②「信州中川村郷談」;下平加賀雄,あしなか127号（山村民俗の会編）,1977年発行
③「ふるさとの昔話」;桃澤匡行ほか編,飯島町公民館図書部,1979年発行.
④「長野県上伊那誌 民俗編上」;上伊那誌編纂会編,1980年発行
⑤「大鹿村誌上巻」;大鹿村誌編纂委員会編,1984年発行
⑥「天竜川の淵伝説」;笹本正治,語りつぐ天竜川:第29巻,1992年発行
⑦「山漁」;鈴野藤夫,（社）山漁村文化協会,1993年発行
⑧「伊那谷の渓流魚伝説」;白鳥孝,伊那路48巻11号,2004年発行
※「天竜川上流の主要な魚 2020」;天竜川上流河川事務所,2020年web公開

飯島町の『あめます岩』と紅鮭鱒大明神（飯島町本郷）



与田切川合流点の天竜川を対岸から撮影。
写真中央の波のない広い水面の場所が淵で、その直上流で与田切川が合流している。
これが伝説の「あめます」がいた淵。
「アメマス霊神」と彫ったとされる「あめます岩」は今はなく、岩の上の祠を囲んでいたとされる大きな松の林も見当たらない。
「あめます岩」は扇ヶ島ともいい、土地の人は鬼ヶ島と呼ぶと伝えられている。写真正面の岩盤がその名残だろうか、その切り立った岩場の上に祠がある。
文献③によると、ここは昔、天竜川の舟運によって上下流から運ばれてきた荷を引き上げる場所だったようで、西岸寺の山門の材は高遠から筏で流してここで引き揚げたとされる。

天竜川に与田切川が合流する場所には大きな淵があります。この淵は、どんなに天竜川が荒れた後でも同じ場所にあり、与田切川から流れ込む清澄な水をあわせて青く深く流れています。

その岸辺は急な地形の岩場がせり出していて、『ふるさとの昔話』（文献③）では、かつてこの付近にあった岩が「あめます岩」とされ、『信州中川村郷談』（文献②）では扇ヶ島と伝えられています。

ここが「あめます伝説」の舞台で、文献②では、この場所の淵で「あめます」を釣り上げて食べた村人の家の中で、近くの家の花嫁が死んでいたため、扇ヶ島の大きな岩に「アメマス霊神」と彫って供養した。しかし与田切川の大水害の時にその岩（扇ヶ島）は跡形もなく押し流され、今はその祭りも絶えてしまった…と伝わっています。

伝説の「あめます岩」は この辺りにあったのだろうか

岩場の上にある祠　淵を見下ろす針葉樹林にひっそりとたたずむ

もう一つの伝説では、「あめます」の供養のために村人が岩の上の大きな松に囲まれた場所に祠をつくって祀り、そこには「紅鮭鱒大明神」と書かれた御弊（おふだ）が納まっているとされています（文献③）。

現地を訪れると岩の上には確かに祠がありました。しかし、それは比較的新しく建てられたもので「紅鮭鱒大明神」の御弊も見えませんでしたが、岩の上にひっそりとたたずみ、天竜川の深い淵を見下ろすこの祠は、伝説のそれに違いないことを静かに告げているようでした。

2月 かわらんべ講座 受付中

※2月の休館日は、5日(月)・13日(火)・19日(月)・26日(月)

■基本的にマスクの着用は個人の判断でお願いします
■念のため、どの講座もマスクは持参ください　地域の感染状況や講座の内容(乗り合わせ移動)などによっては着用をお願いする場合もあります
■天候・水量や感染予防の観点から【中止】や【変更】となる場合もあります　情報はホームページで公表します

春さがし
子どもと保護者　会場：水辺の楽校（屋外）
2/3 土　午前9:30～11:30

冬の星
子どもと保護者　会場：かわらんべと周辺
2/9 金　夜18:30～20:00　定員15組

ひな人形づくり
子どもと保護者　会場：かわらんべ（屋内）
2/10 土　午前9:30～11:30　定員15組

冬の鳥をみつけよう
子どもと保護者　会場：水辺の楽校（屋外）
2/17 土　午前9:30～11:30

天竜川入門 伊那谷名物「ざざ虫」調査
小学生と保護者　会場：天竜川
2/24 土　午前9:30～11:30

絵手紙
成人講座　定員16名
2/1 木　午前9:30～11:30

エコ布ぞうり作り
成人講座　定員15名
2/7 水　終日9:30～15:00

ウォーキング
成人講座
2/15 木　午後13:30～15:30

【注】2月・3月の講座時間は **9:30開始・11:30終了** です

3月 かわらんべ講座

受付 2/3～　受付期間 2月3日(土)から講座日前日まで
※受付期間内でも定員に達した場合は早期に受付終了となります

※3月の休館日は、4日(月)・11日(月)・18日(月)・21日(木)・25日(月)

きれいな石(いし)さがし
子どもと保護者　会場：天竜川
3/2 土　午前9:30～11:30

天竜川の河原で石をひろって種類を見分けたり、流れる水のはたらきで運ばれてきた石のことを学びます
よ～く探せば透明っぽい石や赤い石など、きれいな石も見つかります

【持ち物】
- 石を入れる袋
- 防寒着
- 長ぐつ
- 筆記用具

キノコ栽培(さいばい)
子どもと保護者　会場：水辺の楽校と周辺
3/9 土　午前9:30～11:30

自宅の庭でヒラタケというキノコを栽培してみよう
食べて美味しく、そしてキノコが木材を分解して土にかえす役割を学ぶことができます

【持ち物】
- 原木を持ち帰る袋
- 軍手
- 防水手袋
- 防寒具

グラウンドゴルフ
子どもと保護者　会場：わんぱく芝広場
3/16 土　午前9:30～11:30

ルールも道具も簡単なゴルフです
早春の河川敷の芝広場でのびのびと、遊び感覚でプレーできて、いい運動になります

【持ち物】
- 防寒対策
- 帽子
- 手袋

■会場：わんぱく芝広場
かわらんべから堤防を歩いて5～10分程度の場所です　駐車場もあります（車での来場の場合は【飯田市川路多目的広場】の駐車場に駐車してください）

草(くさ)もちづくり
子どもと保護者　会場：かわらんべ正面
3/23 土　午前9:30～12:00

年度最後の講座です
1年間無事に講座ができたことと、来年度も予定どおりに開催できることを願って、みんなで餅つきをして締めくくります

【持ち物】
- 袋(ヨモギ用)
- 軍手
- 防寒具
- 餅を入れる容器とはし
- 調理の服装 エプロン・帽子・マスク

■成人講座は受付中

絵手紙
成人講座　定員16名
3/7 木　午前9:30～11:30
季節の画題を自分らしく描きます
■持ち物
教材費300円
筆記用具

ウォーキング
成人講座
沿川3地区1周コース
川路/龍江/竜丘を天竜川沿いに歩きます(7km)

3/14 木　午後13:30～15:30
■持ち物
長距離歩く装備

●お申込み・お問い合せ　TEL 0265-27-6115　FAX 0265-27-6125　ホームページ kawaranbe.net　電子メール info@kawaranbe.net